View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by DWCLA Academic Repository

研究ノート

保育の質的評価尺度 ECERS と SSTEW の比較検討と今後の課題

埋　橋　玲　子
同志社女子大学
現代社会学部・現代こども学科
教授

A Comparative Analysis of Quality Rating Scales for Early Childhood Education (ECERS-R and SSTEW) and a Consideration of Future Challenges

Reiko Uzuhashi
Department of Childhood Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,
Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

はじめに

2015年４月より日本では子ども・子育て支援新制度が始まり、これまで以上に就学前の教育や保育の「質の向上」や「評価」に関心が集まるようになった。質の向上の重要性は誰もが認めるところであるが、「保育の質とは何か」「評価とは何か」についての定見を得ることは容易ではなく、議論が続いている。質や評価についての議論は概念を整理し共通認識を得るために重要であるが、実際の保育実践と照合することのないままに重ねられてはならない。

ちなみに国際的に見ると、保育の質の多面性あるいはアプローチの多様性を反映して多くの保育の質の評価尺度が開発されている。それぞれの立場で保育の質を定義し、それに基づく評価規準を示しており、OECD 発行の Starting Strong Ⅲ（2012）でそれらの整理をしている。本稿では国際的に利用実績のある ECERS（エカーズ）と SSTEW（スチュー）という２つの保育の質の評価尺度に注目し、比較検討することで「保育の質」の一つの定義を示し、実践の場での利用の可能性を示すことを目的とする。

1　スケールの概要

（１）ECERS（1980～）について

Early Childhood Environment Rating Scale すなわち ECERS は、T. Harms 博士らによって1980年アメリカで開発された。２歳半～５歳の集団保育（保育プログラム）の保育環境の質を測定し、数値化する尺度のことである。基本的な保育の質の考え方は NAEYC の示す「発達にふさわしい実践 Developmentally appropriate practice = DAP」に依拠している。その後1998年に改訂版 ECERS-R[1] が発行され、アップデート版を経て2015年には大きな改訂を行って ECERS３が発行された。

ECERS は保育室の広さ、保健衛生などをはじめとし設備・備品、教材・遊具、保育者の関わりの様相など43の項目＝観点から当該クラスの保育の「過程の質」、すなわち「子どもが何を経験しているか」を測定するものである。汎用性が高く、アメリカ国内や英語圏の他の国々で使われるだけではなく、翻訳されて各国で用いられている。多くの調査結果が蓄積され、子どもの言語発達や社会性の発達を予測できる尺度として認められている[2]。

内容と方法についての説明は以下の通りである。保育環境の質を大きく７つのカテゴリー（空間と家具／個人的な日常のケア／言語－推理／活動／相互関係／保育の構造／

保護者と保育者）に分類してサブスケールとし、この分類のもと、総数43の下位項目を設けている。各項目に10前後の指標があり、観察またはインタビューによりそれぞれの指標の可否（はい／いいえ）をチェックし、一定の手順で７段階評価により評点を与える。３点で「最低限」、５点で「よい」、７点で「とてもよい」という意味付けがあるが、７点をもって質の上限とするものではない。実際には７点の項目を凌駕する実践は珍しくないが、手続きとしては７点で止まる。評価の際、通常で最低午前中の３時間は対象クラスに入り、保育室内外と保育の様子を観察する。午睡や降園の様子など時間内に観察しきれない指標や項目についてはインタビューを行って評点を得る。

（２）ECERS の周辺

ECERS-R に類する尺度としては同じ著者らによって、０歳～２歳半の集団保育の質を測定する ITERS-R[3]、家庭的保育の質を測定する FCCERS[4]、学童保育の質を測定する SACERS[5] がある。これらは著者らの主催する ERS 研究所によって ERS ファミリーと呼ばれている。

加えてイギリスでは、形式や手続きは同様にして ECERS-R 内のいくつかの項目を発展させ、就学前教育のナショナル・カリキュラムに準拠し、就学準備性を強調した下位項目を設け、それらを独立させて４つのサブスケール（読み書き／算数／科学と環境／多様性）にまとめたスケールを開発した。それが ECERS-E[6]（K. Sylva 他）で、イギリスでの無償幼児教育実施の政策的根拠を求める EPPE 研究（Effective Provision of Pre-School Education ＝効果的な就学前教育の実施、1997～[7]）で開発されたものである。3,000人の子どもを３歳時から追跡した大規模縦断研究で、子どもの就学前の「教育」の有無、経験した就学前教育の「タイプ」、家庭背景などがその子どもの情緒的・認知的発達にどのように影響を与えるかを明らかにすることを目的としていた。このとき、子どもが経験した保育プログラムの保育の質を測定するのに、ECERS-R と ECERS-E が用いられたのである。

さらに付け加えると、ECERS が広まり影響力があることから、形式と手続きを踏襲して集団保育機関の運営管理の質を測定する PAS[8]、家庭的保育の質を測定する BAS[9] も開発されている。ECERS 等の保育内容を直接評価するスケールと、PAS 等のいわば保育のロジスティック面を評価するスケールを併用すると、当該保育プログラムの質を全体として把握することが可能になる。

（３）SSTEW（2015）について

EPPE 研究の姉妹プロジェクトとも呼ばれるのが REPEY[10] 研究であり、この研究の副産物として生まれたのが SST（Sustained Shared Thinking ＝思考を共有し、つなげること）の概念である。以来この SST の概念はイギリスの幼児教育のキィ概念として採用されていった。EPPE 研究では認知的発達は EW（Emotional Well-being ＝情緒的な安定・安心）と両輪となって子どもの発達を促

表１　ECERS-R のサブスケールと項目

サブスケール	項　　目
1　空間と家具	1．室内空間 2．日常のケア、遊び、学びのための家具 3．くつろぎと安らぎのための家具 4．遊びのための室内構成 5．ひとりまたはふたりのための空間 6．子どもに関係する展示 7．粗大運動遊びの空間 8．粗大運動遊びのための設備・備品
2　個人的な日常のケア	9．登園／降園 10. 食事／間食 11. 午睡／休憩 12. 排泄／おむつ交換 13. 保健 14. 安全
3　言葉と思考力	15. 本と絵／写真 16. コミュニケーション 17. 思考力を育てる語りかけ 18. ふだんの会話
4　活動	19. 微細運動（手や指を使う） 20. 造形 21. 音楽／リズム 22. 積み木 23. 砂／水 24. ごっこ遊び 25. 自然／科学 26. 算数／数 27. テレビ・ビデオ・コンピュータ 28. 多様性の受容
5　相互関係	29. 粗大運動の見守り 30. 全体の見守り 31. 望ましい習慣・態度の育成 32. 保育者と子どものやりとり 33. 子どもどうしのやりとり
6　保育の構造	34. 日課 35. 自由遊び 36. 集団活動 37. 障がいのある子どもへの配慮
7　保護者と保育者	38. 保護者との連携 39. 保育者の個人的ニーズへの対応 40. 保育者の仕事環境 41. 保育者間の意思疎通と協力 42. 保育者のスーパービジョンと評価 43. 保育者の研修機会

＊『保育環境評価スケール①幼児版』（埋橋訳、2006、法律文化社）より

表２　SSTEW のサブスケールと項目

サブスケール	項　　目
1　信頼、居心地の良さ、自立へ	1　自己制御と社会的発達 2　子どもの選択と自立した遊びの支援 3　小グループ・個別のかかわり、保育者の位置取り
2　社会的、情緒的な安定・安心	4　社会的、情緒的な安定・安心
3　言葉・コミュニケーションを支え、広げる	5　子どもどうしの会話を支えること 6　保育者が子どもの声を聞くこと、子どもが他者の言葉を聞くように支えること 7　子どもの言葉の使用を保育者が支えること 8　感性豊かな応答
4　学びと批判的思考を支える	9　好奇心と問題解決の支援 10　お話・本・歌・言葉遊びを通した「思考を共有し、つなげること」 11　調べること・探求を通した「思考を共有し、つなげること」 12　概念発達と高次の思考の支援
5　学び・言葉の発達を評価する	13　学びと批判的思考を支え、広げるための評価の活用 14　言葉の発達に関する評価

＊『“保育プロセスの質”評価スケール』（秋田・淀川訳、明石書店、印刷中）より

すことを明らかにし、次なる SEED 研究で SSTEW が開発された（I. Siraj 他、2015発行）。７段階評価であること、スコアリング（評点を定める）の仕組み、質問項目の構成など STTEW スケールは形式について ECERS を踏襲している。

２　内容の比較

（１）項目間の比較

ECERS-R と SSTEW のサブスケールと項目は、表１・２の通りである。ここで注意しなくてはならないのは、ECERS-R には設備・備品などの項目が多く、「構造の質」を評価するように見えることである。しかし、原著者は「過程の質」、すなわち「子どもが何を経験しているか」に焦点を当てた尺度であることを繰り返し強調している[11]。

内容面では STTEW は保育者の役割に強く焦点を当て、プラニングや学びのための環境構成、さらに保育者と子どもの相互関係に注目したものとなっている。これを ECERS-R の側からみると、ECERS-E のサブスケール３・言葉と思考力、サブスケール５・相互関係の内容についてより詳細に叙述されているといえる。ECERS-R では各項目の中に、子どもに考えさせるよう働きかけているかをチェックする指標が含まれている。たとえば、【サブスケール５／項目29・粗大運動の見守り】には、【指標7.1 保育者は子どもと遊びに関係したアイデアについて話し合う（例．年少児には遠い・近い、早い・遅いというような言葉を使うなど)】とある。

（２）日本での利用の状況から

筆者は、ECERS-R や ITERS-R という保育の質の「物差し」を現場の保育実践に当て、目盛りに従って「測定」するという行為を10年にわたり続けてきた。主にコンサルティングで使用したが、現場の保育者の人たちと皆で共通の「物差し」をもち、それに沿って評価し、評価結果を検討するのが一連の流れである。点数をつけて良しとするのではなく、その根拠を話し合って自分たちの保育の実践の現状把握と課題の発見を行うシステムが出来上がっていった。「点数の意味を問う」ことで自分たちの保育を見直し改善につなげていくことこそが保育者自身が行う評価という行為の本質であることに深く思いが至っている。

さて、スケールを使い続ける中で、スケールの項目に従い遊具・教材の充実をはかる → 子どもたちが落ち着いて集中して遊ぶようになる、という第２段階までは遅かれ早かれ順調に進行していくことが理解された。その次の壁となるのが、サブスケール３・言葉と思考力、サブスケール５・相互関係の内容の中のいくつかの指標である。つまり物的に環境が整い、子どもの多様な経験が可能となった段階で保育者がどう関わるか、という課題が立ち現われるのである。このような局面では、SSTEW の指標が示すようなきめ細かなかかわり方は大いに示唆的であろう。

今後の課題

ECERS-E を使用して保育環境を整えることで、全体的に質を向上させ、子どもの経験の幅を広げることが可能になる。さらに保育者からの関わりをブラッシュ・アップす

るにはSSTEWが有効だろう。しかし、ECERS-Eの一部の項目や指標、およびSSTEWが示すような保育者からのかかわり方のいずれも、子どもに対するアプローチの方法を示しているに過ぎない。さらなる保育の質の向上を求めるとすれば、子どもと保育者の間に介在する「もの」や「ことがら」について保育者のもつ確かな見識や知識、考察すなわち「教材研究」が欠くべからざるものとなる。

幼児教育とは、保育の場におかれた「もの」や発生する「ことがら」を介在として子どもとおとなである保育者が交流し、双方が刺激しあい、周囲の事物に対する認識を深め覚醒を促し、それぞれのレベルで新たな発見を得てその快感を味わう営みである。ECERS-EおよびSSTEWは「どのように」は示してくれるが、「もの」や「こと」、つまり「何を」については答えを与えてくれるものではない。それは保育者に問われることであり、最終的な課題であるといえる。

注

1　*Early Childhood Environment Rating Scale Revised edition.*

2　Environment Rating Scale Institute http://www.ersi.info/

3　= *Infant and Toddler Environment Rating Scale*（拙訳『保育環境評価スケール②乳児版』法律文化社、2004）.

4　= *Family Child Care Environment Rating Scale*（1989）

5　= *School-Age Care Environment Rating Scale*（1996）

6　= *Early Childhood Environment Rating Scale-Extension,* 正確には *The Four Curricular Subscales Extension to the ECERS-R.*

7　EPPEは継続され、調査開始時に3歳であった子どもが16歳に至るまで追跡され、EPPSE（= Effective Pre-school, Primary and Secondary Education）研究となり、その成果が2014年9月に発表された。子どもがどの社会階層に属していても就学前教育は良い影響を与えること、1年よりも2～3年の経験がある者のほうが良い成績を示していること、質の高い就学前教育が16歳時の良い成績につながること、とりわけ困窮地域出身の子どもには質の高い就学前教育が有効であることなどが示された。

8　= *Program Administration Scale*（2011）

9　= *Business Administration Scale*（2009）

10　= Researching Effective Pedagogy in the Early Years.

11　Environment Rating Scale Institute http://www.ersi.info/